

加古川紙相撲新聞

2024年(令和6年) 2月12日 第21号

発行所:兵庫県加古川市北在家 加古川紙相撲新聞社

第17回 紙相撲本場所 幕内優勝

前頭(全勝) 紅桜

(初) 殊勲賞 関脇 天狗岳 敢闘賞 頭頭 紅桜 熱闘賞 前頭 宇多の富士

新入幕紅桜が全勝優勝

横綱羅皇を決定戦で破る

第十七回加古川紙相撲本場所(一月三日)は二月三日に千秋楽を迎え、今場所新入幕の西前頭十三、紅桜(保山)が横綱羅皇(岩ノ城)を決定戦で破り、初優勝を飾った。新入幕力士の全勝は第九回本場所の如く以来、史上二人目の快挙。羅皇は決定戦で敗れたものの連勝記録を三十三に伸ばした。三賞は殊勲賞が西関脇天狗岳(万寿山)、敢闘賞は優勝した紅桜、熱闘賞は東前頭十五、宇多の富士(万寿山)が受賞した。幕下は徳鵬(友砂)、序ノ口は苗丸(今出川)が優勝した。



優勝決定戦で横綱羅皇を押し込む前頭・紅桜

勝負が決まった瞬間、場内は大歓声のあとに異様なよめぎが起きた。眼前の光景がまだ信じられないのだ。勝ち名乗りを受けるのは、新入幕の紅桜。そして土俵に一礼して花道を引き上げるのが、常勝横綱羅皇なのだ。入門からほとんど脚光を浴びたことがなかった。初土俵こそ四勝一敗で幕下に昇進したものの勝ち越せず、すぐに序ノ口へ逆戻り。出直しとなった序ノ口でまさかの負け越し。結局入幕まで六場所を要した。同期にはすでに幕内上位で活躍している天狗岳、震電、須佐の海らがいる。場所が始まると紅桜は初日から快調に白星を重ねていった。そして中白(なかび)でストレー

ト給金したが、それでも審判部は「そのうち負けるだろう」と上位との対戦を組まなかった。つまり、それくらい注目度が低かったのだ。紅桜はこう語っている。「ここまで来るのに、すく時間がなかった。だからとにかく勝ち越したい一心でした。中日で勝ち越して自分もびびりました。でも優勝なんて夢にも思わなかったです。」

ノマークだった。ところが九日目になっても勝ちっぱなしなので、これは「ズイ」と思った。横綱大関の割はもう組んでしまっている。だから十日目(関脇)の菊千代と組んだ。菊千代なら止めてくれるだろうと。ところが紅桜は菊千代にも負けなかった。本来ならもっと早い段階で上位に当てておくべきだったが、時すでに遅い。千秋楽は割を崩して横綱紫電改との対戦が組まれた。そのあおりで紫電改は大関大木戸の対戦が組まれないという珍事が起きた。いくらなんでも横綱に勝つことはないだろうと思われたが、なんと横綱初挑戦で紅桜は金星を上げてしまったのだ。土俵下でこの一番を目の当たりにした横綱駒響は、「まさかと思った。これで自分の優勝がなくなったかと思うと力が抜けてしまった」と述懐している。

横綱羅皇は気落ちした駒響を一方的に破り、三場所連続全勝で三十三連勝を達成。そして全勝同士の優勝決定戦を迎えた。 「紅桜とは稽古すらしたことがなかったという羅皇。軍配が返ると紅桜はすぐさま喉輪を狙ってきた。びびりした。こんな強い喉輪があるなんて。喉輪押しにはめっぽう強い羅皇だが、紅桜の強烈な喉輪に羅皇はズルズルと押しされた。なんとか左に回りながら喉輪を外そうとしたが、紅桜の出足は鋭い。組まれたら終わり。とにかく無我夢中で押し続けたと紅桜。羅皇が懸命に堪えて土俵中央に戻った瞬間、紅桜の強烈な押しが決まった。羅皇はもとむと打って仰向けに倒れ、この瞬間に紅桜の初優勝が決まった。 「その瞬間、何が起きたかわからなかった。しばらくそのまま横綱を見ていたんです。主太郎さんに促されてやっと勝ったことがわかりました。」

「あんな秘密兵器を持っていたのか？」 「紅桜とは稽古すらしたことがなかったという羅皇。軍配が返ると紅桜はすぐさま喉輪を狙ってきた。びびりした。こんな強い喉輪があるなんて。喉輪押しにはめっぽう強い羅皇だが、紅桜の強烈な喉輪に羅皇はズルズルと押しされた。なんとか左に回りながら喉輪を外そうとしたが、紅桜の出足は鋭い。組まれたら終わり。とにかく無我夢中で押し続けたと紅桜。羅皇が懸命に堪えて土俵中央に戻った瞬間、紅桜の強烈な押しが決まった。羅皇はもとむと打って仰向けに倒れ、この瞬間に紅桜の初優勝が決まった。 「その瞬間、何が起きたかわからなかった。しばらくそのまま横綱を見ていたんです。主太郎さんに促されてやっと勝ったことがわかりました。」

この番について、南の海理事長は複雑な表情でこう語った。「まさかと思った。あの強い横綱が新入幕力士に負けるなんて...そんなこと



初優勝した紅桜。なぜ急に強くなったのか？



無類の強みを発揮していた羅皇だが

師匠の保山親方はこう語る。「明らかに相撲ぶりが変わった。以前は取り口が雑で、前に落ちたり逆転されたりという相撲が多かったが、先場所あたりからスキのない相撲に変わってきた。入幕して落ち着きと力強さが出てきた。」 その豹変ぶりに紅桜は千秋楽打ち出し後に急遽体格検査が行われた。何か細工もしたのではないという疑念を晴らすためだったが、体重は「プログラムでまったく問題なし。むしろ羅皇や駒響よりも重たい。プログラムに比べると、軽量級に属するくらいだ。」

「今まで目立たなかった力士が急に強くなる。昔の双葉山や千代の富士みたいだね。こういうことがあるから紙相撲はおもしろいんだよ。」(井上相談役) 一躍ヒーローとなった紅桜。おそらく来場所は三役に名を連ねることになるだろう。次期大関候補として注目度が、一気に高まることになる。新しいヒーローの誕生が、それも「発屋」に終わるのか、紅桜の真価がそこで問われることになりそうだ。

インタビュー

美味くて安くてオシヤレ 鶴林寺せんべい

加古川名物 加古川製菓